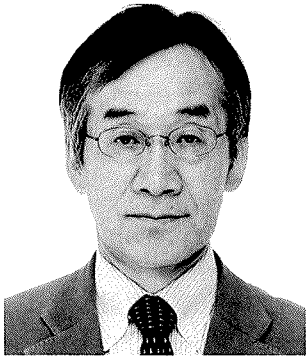


忘れられている分別とリサイクルの目的



教授 松藤 敏彦

北海道大学大学院 工学研究院

5月の終わりに、「古着の回収・リユース」についてテレビ局のインタビューを受けた。札幌市がクリーニング組合と協定を結び、約600か所のクリーニング店を拠点としてごみの減量・資源化の推進を進めるのだという。アジア諸国でリユースすると聞いてすぐ頭に浮かんだのは、東日本大震災の被災地に送られた古着の多くが廃棄物になったとのニュースである。種類、サイズ別に整理されていけばよいが、いらぬものを詰め込んできたものも多かったという。札幌市の計画ではクリーニング店で回収した古着は、プライバシー保護のため選別仕分けをせずに梱包し、送り先が何を必要としているかも調査していないそうだ。学生に話したら、寒冷地の服が東南アジアで使えるのかとの意見もあった。送った先で利用されないと最悪はごみの輸出になり、回収に協力した人たちが「いい事をした気持ちになる」だけである。放送は見なかったが、家人によると番組の最後に調子の合わないコメントをしていたそうだ。インタビュアーは納得して聞いてくれたのだが、環境に優しいとのストーリーは変えられず、一応登場させてくれたのだろう。

ホームページを検索すると、途上国にモノを送る行為は広く行われている。「日本ではゴミとして扱われたり、捨てられてしまう物でも、世界には喜んで使ってもらえる人々がいます。日本の皆様の不用品はゴミではありません。とても貴重な『命を守る資源』です。」との文面は、善意を理解する一方で、こうした不要品をため込んでいる生活スタイルには違和感を覚えてしまう。(部分の抜き書きは誤解が生じるかもしれない。ワールドギフトホームページ[※]で、全文をお読みください。) ふたたび古

着に戻ると、途上国ならば使い古しでよいのか。古着をリユースするより、自分で愛着を持って長く大事に使えばよい。余計なものは買わなければよい。札幌市は「ごみ減量」のためとしたが、タンスにしまわれていただろうから現時点でごみは減らず、名目は正しいとは言えない。ちなみに、上記のホームページの呼び掛け文には、「整理したいけど愛着があって捨てるに捨てられない」などのほかに、「気持ちよく不用品を手放せる捨て方はないだろうか?」もあった。

古着の例は、日頃から気になっているリサイクルの問題と共通点がある。循環型社会を目指すためとして、90年代後半から自治体はリサイクルにとりくみ、分別数も増加した。市民は文句も言わず協力しているが、集められた後のことはほとんど知らされていないし、知らずともしていない。ところが「混合収集によって集められたびん・缶・PETボトルのうち、ガラスびんがパッカー車内で割れてしまい、選別時に回収できず40%が埋立か焼却されている。」「枝葉草を分別収集し堆肥化を行っているが、プラスチック除去が難しく、見た目が悪くて利用先が見つからない。」この2つは筆者の住む札幌の問題である。「最終的な利用に至らない」ならば、リサイクルとは言えない。製品製造は必ずニーズに合わせて行われるのに対し、途中のロスやニーズに無関心で、とにかく集めようとするリサイクル例も少なくない。

3R(リデュース、リユース、リサイクル)は、すっかり社会に定着した。「発生抑制、再利用、リサイクルを考え、次にエネルギー回収、熱処理、以上のことができない場合に適正に処分」との優先順位を示されると、3R

がごみ処理の解決策であると思う市民がいても不思議ではない。最近では、取り組みの進んでいない2R(リデュース、リユース)重視の傾向も強い。しかし、2Rでどれだけごみを減らせるのだろうか。販売、消費構造を変えない限り、個人として実行できる発生抑制は限られている。リユースはそもそも耐久財の寿命を延ばすものであり、ごみの大半は容器包装を中心とする寿命の短い消費財である。取り組みを進めたとしても、2Rはごみ減量の効果的手段にはならない。生活スタイル変更を目的として考えるべきである。一方、3Rを実行しても必ず処理、処分の必要な廃棄物は残り、その段階で大きな環境影響が生じうる。3Rは、ごみの焼却や埋立処分による環境影響を最小にするための必要条件にすぎず、ごみ処理全体の中で、特に下流側に対してどれだけ効果があるかを認識しなければならない。なお、Reduceはごみ階層構造の中ではwaste minimizationと言われていたもので、ごろ合わせなのだろう。

ごみ処理の最初の段階である自治体の分別についても触れておきたい。「正しく分別すること」に、自治体、そして市民は大変な努力を払っている。その表れのひとつが「分別辞典」であり、大多数の自治体で作成されている。項目数はずいぶん幅があるが、筆者が調べた中で最多は横浜市で「か」(か行ではない)から始まるだけで234項目もあり、中には「化石、かかし」など家庭から排出される可能性がきわめて低いものも含まれている。各項目は素材の種類により可燃、不燃などの分別区分が指定されるのだが、「ボールペンのばねは不燃」を守らないと、焼却処理にどのような悪影響が生じるだ

ろうか。また市民の何パーセントを協力目標とするのだろうか。20%が完全に分別したとしても、焼却ごみの特性は大きくは変わらない。資源物の分別には、自治体、市民はもっと神経を使っている。大都市を中心に「ごみ分別ルール違反を、袋を開けて調査」する自治体が増えているらしい。開封によって排出者を特定し、指導、勧告、過料を定めるところもある。自治体はいったい、どこまで分別率を高めることを目標としているのだろうか。分別徹底によりどれだけごみが減るか、資源回収量が増えるかといった、目標を持っているのだろうか。そうした根拠がないならば、単なるマナー指導と見られても仕方がないだろう。「実家に帰省していたら分別が悪いとの電話がかかってきて、東京まで帰った」との投書も、特別な例ではないかもしれない。

古着の回収も、資源化のための分別も、リデュースやリユースも、可燃ごみや不燃ごみの分別も、悪いとは言わない。しかし、そもそもの有効利用とは、ニーズが先にあつたはずだし、不燃物や生ごみの分別は、焼却しやすくなるなど処理を考えてのものであつた。それがいつのまにか、主客転倒してはいないか。何を目標としており、どれだけ成果につながるかを知らずにする行動は「いいことをしている気持になる」だけかもしれない。市民に対する施策を実行する行政を始めとして、コンサル、メーカー、そして研究者がそうした行動の先導(扇動)をしていないか、しっかりと考える必要がある。

※ワールドギフト国際社会支援推進会、

<http://world-gift.com/>